

3. 肉用鶏飼養農場で発生したマレック病とその対策

1 滋賀県家畜保健衛生所、2 滋賀県畜産技術振興センター

○金谷須美礼¹、浅井素子¹、小畑敦俊²

県内の肉用鶏飼養農場(開放平飼、ブロイラー3万羽、地鶏1万羽)において、平成26年11月導入の群から顕著な育成率の低下が認められた。病性鑑定では非化膿性脳炎などが確認され、マレック病(MD)の関与が疑われた。当該農場は、日齢の異なる鶏を同時に飼養しており、ひなが早期にMDウイルス(MDV)に感染しやすい環境であった。そこで早期感染を防ぐため、ひな飼養鶏舎の外部との遮断を徹底するとともに、鶏舎のふき取り材料の細菌検査およびMDVに対するPCR検査の結果に基づき、鶏舎の消毒方法を逆性石けんから塩素系消毒薬の発泡消毒に変更し、鶏舎全体にドロマイト石灰乳の塗布を実施した。対策後には育成率は回復し、従業員の衛生管理への意識も向上した。一方で、農場で検出されたMDVの病原性を確認し、当該農場で初生ひなに接種しているMD2価ワクチン(血清型1、3)の有効性を検討した。死亡鶏の脳乳剤と環境材料から検出されたMDVについて、病原性に関与しているとされるmeq遺伝子の塩基配列を解析したところ、両者は100%一致し、死亡羽数増加の原因となっているMDVは、単一の株と推察された。さらに、系統樹解析およびアミノ酸配列の解析では、検出された株は既存の強毒株と近縁であり、接種ワクチンは有効と推察された。これらから、今回の発生の原因は、ワクチン株の選択の問題や高病原性株の侵入ではなく、農場環境であると考えられ、今後も鶏舎の洗浄・消毒の徹底や早期感染防止対策を継続して指導する。